
おばちゃん

麻真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おばちゃん

【ZPDF】

2019M

【作者】

麻真

【あらすじ】

お世話になっていたおばさんが亡くなる。

おばさんとの思い出、その生きさま、入院中の様子などを振り返りながら、確かにこの前まで存在していたおばさんが、もうこの世に存在しないことを、自分の中で整理していく。

おばさんに学んだことを次の世代に伝えること、おばさんのような「おばちゃん」になることを目標にすることで、最終的に、おばさんの死を受け入れる。

おばちゃんが亡くなつて、初めての夏。私たちがおばちゃんの初盆のお参りをするため、島に渡る船に乗つていた。

ものじこりついた頃から、夏が来るたび、こつして幾度となく島に向かつたものだ。母と私と妹、そして、私と妹にそれぞれ娘が生まれてからは、子供たちも連れて。

海のない土地で暮らす私たちは、この船に乗るのがうれしくて、島が見えてくるのを心待ちにしながら、デッキで潮風を楽しんだものだつた。でも、今日船上で過ごす時間は、今までと全く違つ。浮かれた気持ちには、もちろんならなかつた。

「よう来たのう。楽しみにしきて、首がなあじうなつて、また元に戻つたわ。」

おどけて子供たちを迎えてくれたおばちゃんの言葉を、もつ聞くことはできない。そのことが、周りの風景をえていた。海を渡つている風も、水面に反射する光も、変わってはいはずなのに。めつたに会えない人の死を受け入れるのは難しい。今まで通り、会えないだけで、そこに行けばまた、いつものように笑つてくれる。そんな気がしてしまつのだ。

おばちゃんがいな島に行くのは、今回が初めて。私にとって今日は、おばちゃんが本当にいなくなつてしまつたことを確かめに行くのよう気がしていた。それを認める心の準備をしながら、私は船室に座つていた。

おばちゃんは母の姉。私たちが住む広島県の隣、岡山県の笠岡市から船で約一時間の北木島にお嫁に行つて、そこで生涯を過ごした。共働きだった私の両親は、幼いころの私と妹を、毎年夏休みになると、おばちゃん夫婦にあづけていた。私は事情もわからず、夏休みになると島に泊まりに行けることが、楽しみでたまらなかつた。

北木島は、私にとって、夏になると帰りたくなる、ふるやとのよつな場所になっていた。

おばちゃんの家は石工場を営んでいた。おばちゃんの五人の子供たちは、当時みんな成人するかしないかだったから、やつと子育ても一段落した頃だつたろう。そんなとき、わが子よりずっと手のかかる、わがままな私たちが、毎年家をひつかきまわしに行つていたのだ。その頃は考えもしなかつたが、きっと大変だったはずだ。

おばちゃんは毎日、浜まで泳ぎに連れて行つてくれた。日傘をさして、私たちが溺れないように、そばでずっと見守つてくれていた。少し体重のあるおばちゃんが、長い時間立つていることは、水遊びをしている私たちよりも、はるかに疲れたに違ひない。同じ年頃になつてみて、それがやつとわかる。

近所の子供と喧嘩をしたこともある。わが子のしたことでもないのに、おばちゃんが頭を下げてくれたこともあつたと思つ。おばちゃんには、いろいろ迷惑をかけた。

私が高校生のころ片親になり、それ以来、母が女手一つで私たちを育ててくれた。そんな大変な時代も、おばちゃんは私たちを心配し、支えてくれた。おばちゃんは、母の次にお世話になつた人だ。

おばちゃんは、「周りの人々に、感謝しなさい」と教えてくれた。おばちゃん私たちに迷惑をかけ、やつと所帯を分けた父親にまで、そこまで育ててくれたことに感謝するようになると、父を憎んでいた私は、その時は反発を感じ、黙つていたよつて思つ。けれど、年を重ねると、少しずついろんなことが許せてくれる。まだ父親に感謝することはできないけれど、もつと年をとれば、そんなことができる日が来るのかもしれない。

おばちゃんの家には、いつもたくさんの人人が集まつていた。私と妹以外にも、甥や姪がよく泊まりに来ていたし、大学生になつたいとこが、泊まりこみで石工場のアルバイトをしていたこともあつた。おじちゃんも、来るのはすべて受け入れてくれた。器の大きい夫

婦だった。

おじちゃんは、十数年前、癌で亡くなつた。この頃、おばちゃんたちは孫が十五人、ひ孫も数人いて、もちろん、私たち、お世話になつた甥や姪もかけつけたから、お葬式に集まつた親戚の数はすごいものだった。

おじちゃんがいなくなつて、おばちゃんは寂しそうにはしていたけれど、それでも八十の声を聞くころまで、病気ひとつせず、元気でいてくれた。ところが、一昨年の末、突然脳梗塞で入院。その知らせを受け、私たちは、遠い病院を地図で探し、お見舞いに出かけた。

何度も道に迷い、たどり着いたのは、行くと言つていた時間より二、三時間も過ぎたころ。このとき、まだしつかりしていたおばちゃんは、

「危篤じゃ いつて連絡したら、骨になつたごろ着くわいの。」

と、いつもの穏やかな口調で「冗談を言いながら、私たちを待つてくれた。意外に元気そうで、これならきっと良くなるだろうと、ちょっと安心して病院を後にした。

ところが、事態はそんなに簡単なものではなかつた。近しい人たちのほとんどが住んでいる笠岡から、かなり離れた病院での生活。いつも人に囲まれていたおばちゃんには、その寂しさが耐えられなかつたらしい。入院が長くなると、うつ病の症状が出始め、痴呆が始まつて、坂を転げ落ちるようになり、おばちゃんの状態は悪くなつた。そんな様子を聞きながらも、遠いことを言い訳に、私たちは一度目のお見舞いに行くことができなかつた。

一度は退院して、笠岡の娘のところで養生していたのだけれど、人が変わつたようにわがままで意地悪な言葉を周りに投げつけ、面倒を見る人を困らせていたらしい。あの穏やかなおばちゃんの、どこにそんな人が隠れていたんだろう。次の冬が来て、風邪をこじらせたおばちゃんは、もう一度入院することになつた。

最初の入院の時は違い、おばちゃんは見ている人も辛くなるく

らこ、苦しそうだった。酸素マスクをつけ、体中で息をしてくる。

「しんでえよつ、しんでえよつ……」

時々うなされるように言つた。私たちが来ていることは分かっているようだけれど、

「しんでえけえ、もうええわ！ 帰れ。」

おばちゃんが投げつけるように言つた。人が変わつてていると聞いていたし、今のおばちゃんに、人を気遣つ余裕なんてないのもわかる。冷たい言葉に驚きもせず、

「うん。じゃあ、また来るね。」

と病室を出ようとした。そのとき、あの状態でどこからふりしぶつたのかと、うほど大きな声で、

「ありがとう！ ありがとう！」

おばちゃんが何度も叫んでいた。やつぱり、おばちゃんだ。人に感謝することを、私に教えてくれたおばちゃんだ。どんな状態になつても、あのおばちゃんが消えてしまつことはない。

「もう元気になつて帰ることはないかもしれんよ。」

おばちゃんの娘のまあ姉ちゃんが、ロビーで私たちにさう告げた。でも、まだそうと決まつたわけではない。望みがある限り、みんながその可能性を信じている。詳しい病状を聞いていると、病室にいたおばちゃんの長男、かつくんが呼びにきた。

「もう会えんかもしれんけえ、やつぱり帰るなよう。」

私たちは、もう一度病室に戻つた。

おばちゃんは、顔をゆがめて、肩で息をしながら眠つていた。その姿を見ているのも辛かつたけど、おばちゃんが望むのなら、そばにいてあげたい。私たちは、しばらくその姿を見守つていた。一時間くらいいたかもしれない。その間、おばちゃんはずつと眠つたままだったので、その日は帰ることにした。

今回の病院は笠岡で、わかりやすい場所にあつた。私たちは週末ごとに、おばちゃんに会いに行つた。今さらそんなことをしたって、何の恩返しもできないことはわかつていたけど、今まで会えなかつ

た分、少しでも長い時間、おばちゃんと過ごしたかった。

「いつお見舞いに行つても、今度はいつも誰かがいた。」「なら、おばちゃんが寂しがることはない。」

おばちゃんは、私たちのことがわかる日もあつたし、わからない日もあつた。酸素マスクの下で、必死に何かを話してくれるのだけど、聞き取れなくて、情けない思いをすることもあつた。少し体調がいい日には、まるで私たちの母のよつなか、憎まれ口をたたくことも。でも帰る時には、必ず

「ありがとう。」

と言つて送り出してくれた。

一日中マラソンをしていくよつなかで耐え、息をすることだけに全精力をそそぎ、おばちゃんは何か日も頑張つた。そして、あたかくなつたころ、おばちゃんは少し良くなつた。

最後にお見舞いに行つた時には、呼吸が少し楽そうで、もしかしたら退院できるんじやないかと期待した。

「まだ、お迎えは来んわ。」

おばちゃん自身も、もう大丈夫だと私たちに言つた。だけど、それが私たちの聞いた、おばちゃんの最後の言葉になる。五月、おばちゃんは亡くなつた。

生を受けたからには、いつか必ず来るのがわかつてゐるその日。だけど、考えたくなかったその日。おばちゃんはおだやかな顔で、眠つていた。

松の木が何本があるだけで、その重さで沈んでしまいそうな小さい島が見えると、船は豊浦港に着く。フェリーを降りると、私たちはいつも道を歩いて、おばちゃんの家に向かつた。

「遠くから、よう來てくれたねえ。」

ガラスの引き戸の玄関で迎えてくれたのは、かつくんのお嫁さん。

当たり前のことだけれど、やっぱり、おばちゃんはいない。

お盆は毎年、おばちゃんの子供や孫、そして孫がそれぞれ連れて

くねひ孫たちで「」た返してこる。ましてやおばちゃんの初盆だから、私たちは遠慮しようとも、一日遅らせたのだけれど、今日は全くお嫁さんがいない。

「昨日までたくさん人が来とつたんじやけどねえ。」
お嫁さんが言った。いつも元気やかな家なのに、一日遅らせただけで、「」とも珍しい。

仏壇に手を合わせ、そのあと、お墓に参りせても「」とした。おじちゃんのお墓参りに来てこたから、場所は知つてこむけれど、「今日は一回田じや。」

と言しながら、かつくんもついて来てくれた。

お墓はそう遠くない場所にある。だけど、急な坂を登らないといけなかつた。七十になつた母は、少ししどしどにしながら、急な石段をゆっくりと登つていぐ。それを励ましながら、子供たちも一緒に登つた。木の枝がトンネルのようになつたところを抜け、開けた場所に出ると、たくさんのお墓が見えてくる。その中の一区画が、おばちゃんの家のお墓だ。

おじちゃんのために手を合わせていたお墓に、今日はおばちゃんのためにお線香をあげる。仲の良かつたおじちゃんと同じお墓の中に、今、おばちゃんはいるのだ。まだ実感はわからないけれど、頭では理解している。

「今、お母さんのもの、整理しようとしたよ。何か形見になるもんがあつたら、持つて帰つてね。」

お墓から帰ると、お嫁さんが言つてくれた。

「ありがと。」

実は今日、もしもりえるな、「」からお願いしてみよつと思つていたものがあつた。

「おばちゃんが、キー ホルダーをたくさん入れた引出しを見せてくれたことがあつたんじやけど、その中のキー ホルダー、いくつかもらつてもいいかな。」

おばちゃんはキー・ホルダーを集めるのが好きだった。

「こうやって土地の名前が入つとつたら、見ただけで、どこへ行つたんかわかるじゃん？　じゃけえ、どつかへ行つたら、いつもこうこうのを買うんよ。ときどき引出しをゆすって、ジャラジャラいうのが楽しみなんよ。」

おばちゃんはそう言って、引出しを左右に振つて見せてくれた。だから私も、ちょっとした旅行をするたび、おばちゃんに地名の入つたキー・ホルダーを買つて帰るようにしていた。

おばちゃんが六十を越えたころから、母と私と妹はおばちゃんを誘い、ときどき一緒に旅行をしていた。その時にも、おばちゃんは、行く先々でキー・ホルダーを買つていたと思う。私たちがおばちゃんと共にした思い出で、形に残つているのは、旅行の写真と、そのキー・ホルダーたちだけだ。そのままずっと引出しに入つていたら、家に残された人たちには、意味のわからない、ガラクタになつてしまふかもしれない。私たちとの思い出は、私たちが預かつて帰るのがいいような気がした。

かつくんとおばちゃんの部屋に行き、昔見せてもらつたときの記憶を頼りに、その引出しを探した。

「これか？・・・違うの？。こっちか？・・・ああ、これじゃん？。押し入れの中に、その箱型の、持ち運びができる引出しあつた。みんなのいる部屋に持つていき、引出しを開けてみる。三段ある引出しあは、どれもキー・ホルダーでいっぱいだつた。ほとんどが、買つた時の袋に入つたままになつていて、おばちゃんがそれらをどれだけ大事にしていたか、よくわかつた。

『笑子がくれた尾道』おばちゃんの字で書いた袋が目に入る。たぶんこれは、私がお土産に渡したものだ。私の名前は「恵美子」と書いて「えみこ」なのだけれど、おばちゃんはお年玉の袋にも、いつも「笑子」と書いてくれていた。おばちゃんは私の名前をその漢字だと思い込んでいたのだろう。でも、それを見るたび、笑顔の少ない私に、おばちゃんが『笑いなさいよ』と言つてくれてるみた

いな気がした。だから私は、あえて間違いを指摘せず、いつもそのまま受け取っていた。

「これは、私がもううね。」

私は、一番にそれを、自分のカバンにしまった。

これはあのときのお土産、これは一緒に旅行したときの、と、思い出を語りながら、母と私と妹でキー ホルダーを分けていく。最初は遠慮がちにカバンに入れていたけれど、

「一緒に行ったときは、全部持つて帰りやいいが。」

そう言われて、それもそつだと思った。私たちとおばちゃんとの思い出を欲しがる人なんて、他にはいない。

ひとつひとつ、袋に入つたキー ホルダーを確かめながら引出しから出していくと、底から紙の袋が出てきた。中を見ると、一緒に青森と北海道を旅行したときの遊覧船のチケットや、記念館のパンフレットなど、細々したものがたくさん入つていた。

「おばちゃん、全部大事にとつといてくれたんじゃね。」

と妹。私たちが思つていた以上に、おばちゃんは私たちとの行った旅の思い出を、大切にしてくれていたのだ。その袋も、私たちが持つて帰ることにした。

私と母と妹は、三人とも気が強く、よく一緒に行動するくせに、すぐ喧嘩になる。おばちゃんとの旅行中も同じだった。三人のうち誰か一人が喧嘩をし、空気が悪くなると、おばちゃんが和ませてくれて、楽しく旅行が続けられていた。

旅行中、駐車場で、よその旅行者とトラブルになりそうだったときも、

「相手にするな。もう車を出せ。」

穏やかな声で、後部座席からおばちゃんが言った。その通りだ。せつかくの楽しい旅行で、わざわざこんな不愉快な思いをしなくともいい。私はそれ以上何も言わず、車を出した。

私たちと同じ血が流れるおばちゃんが、生まれつき穏やかな性格

だつたとは、私は思つていない。考えてみれば、子供の頃には、わが子や私たち姪や甥を叱るとき、うちの母ばりのきつい言葉がよく飛んでいた。そんなおばちゃんが晩年穏やかに見えたのは、おばちゃんの上手な生き方によるものだつたのではないかと思つ。

おばちゃんはきっと、腹が立つことがあつても、見ないようにして、聞かないようにして、波風を立てずに生きることを選んできたのだろう。狭い島で一生を終えるために、それは必要な知恵だつたのかかもしれない。

自分が我慢することで、周りがうまくいくならそれでいい。そうやって内に溜めてきたものが、病気になつてあふれ出し、わがまま放題になつたのなら納得がいく。病院でのおばちゃんの言動は、私の母にそつくりだつたから。同じような性質で生まれても、どう生きるかで、人生は大きく違つたものになるのだ。

旅の話をしながら、ひとつおり引出しを見終わると、キー・ホルダーは、ほとんど私たちのカバンの中にあつた。おばちゃんと一緒に旅行に行つていたのは、私たちだけだつたらしく。

「子どもら、昼から海で泳がせてやればいいが。」

言つてもらつたけれど、今日はそんなつもりで来てないから、と、帰りの船の時間を聞く。港までは近いから、十五分も前に出れば充分だ。もう少し時間があつたので、ちょっとゆつくつさせてもらつて、私たちはおばちゃんの写真にさよならを告げた。

港まで、かつくんが見送りに来てくれた。島に住んでいるまあ姉ちゃんも、キー・ホルダーを分けているときから来てくれていて、一緒に港にいた。

おばちゃんがいたときから、帰る時には、いつもこうして見送りをしてもらつていた。その時おばちゃんの家に遊びに来ている子供や孫がいれば、みんなで来てくれるのだ。船が出てから見えなくなるまで、デッキにいる私たちに、ずっと手を振り続けてくれる。この瞬間、いつも胸がしめつけられる。島を去るのは、いつだつて名

残惜しかつた。時には涙が出ることもある。おばちゃんがいなくなつても、この時間は変わらない。

ふたりの姿が見えなくなるまで手を振つて、私たちはデッキの椅子に座つた。子供たちは、お盆の間だけサービスでやつているというスーパー・ボールすくいに熱中。その声をかき消す船のエンジン音をBGMに、私は自分の中のおばちゃんの存在について、ぼんやりと考えていた。

おばちゃんはやはり、もうこの世には存在しないことを、今日はつきりと確かめてきた。

人がひとり生きて、そして、いなくなるつて、どういふことだらう。おばちゃんという、ひとりの人間がいたことは確かで、そのおばちゃんがいなくなつたことで、いろんなことが変わつた。めつたに会わない私がそう感じるくらいだから、身近で過ごしていた人は、私たち以上に、もつともつとそんな風に感じているはずだ。

五人の子供を育て上げ、甥や姪の面倒を見、孫を慈しみ、十人以上のひ孫と出会い、おばちゃんの一生は終わつた。人を育てることに徹した、実りのある人生だつた。

いくらかの写真と、このキー・ホルダー。形のあるものとして、私たちのものに残つた、おばちゃんが存在していた証は、これだけ。そして、これだつて、私たちがいなくなつたら、なんだかわからないものとして、捨てられてしまうだろう。

歴史上の人物のように、語り継がれるでもなく、綴られるでもなく、じうして人の一生は終わつていく。何の形にも残らなくとも、おばちゃんとの記憶を持つた私たちが、こうやっておばちゃんを語ることで、おばちゃんが存在していたことを確かめる。

私たちがおばちゃんと同じように、いつか人生を閉じたとき、私たちの存在と一緒に、おばちゃんの記憶も消えてしまうけど、今度は私たちが生きていた記憶が、誰かの中に残つていくのだろう。

おばちゃんに教えてもらったことが私たちの中に残り、それがま

た、次の代に伝わっていく。そんなふうにしてしか、おばちゃんの存在を残していく方法を、私は思いつかない。

私も四十代半ばになり、人生の折り返し地点を過ぎた。若い頃のようない無理もきかなくなつて、ひとりで育てている娘が自立するまで元気で働き続けることにさえ、少し不安を感じ始めている。自分と娘のことだけで手いっぱい。一日一日をなんとか過ごすだけの毎日だ。

ちょうど今の私くらいの年齢のとき、おばちゃんは自分の子供たちだけでなく、私や妹、そのほかにもたくさんの甥や姪を引き受けていた。年を重ねても、孫、ひ孫と、おばちゃんの家には、いつも人がいっぱい集まっていた。

「家いうのは、人がたくさん来るようじやないといけんのんよ。」いつかおばちゃんが言つていた。そんなおばちゃんを見て大人になつたのに、今の私の生活はなんだらう。仕事で帰りが遅いのを言い訳に、足の踏み場もない部屋。たまに人が訪ねて来ようものなら、大慌てで座るスペースをあける。散らかつた部屋を見せられるほど親しくない人なら、玄関先で立ち話をしてお帰りいただくというありさま。おばちゃんに教えてもらったことが、全く身についてない。

「料理はこうやって、ときどき味見をしながら作るんよ。」
と、一緒に台所に立たせてもらったこともあるのに、味見以前に、忙しさにかまけて、まともな料理を作つていない。

でも、いくらか、おばちゃんから学んだことが、自分の中に浸透していると感じることがある。

まずひとつは、人に感謝をすること。最後までりがとうの言葉を忘れなかつたおばちゃんの教えは、私の娘にもちゃんと受け継がれている。

もうひとつは、けんかつ早かつた私が、人との口論を避け、調和を最優先するようになったこと。職場ではできるようになつたけれど

ど、家族の間ではまだまだなので、孫ができる頃を目標に頑張りたい。

近頃、「おばちゃん」なんて言葉が似合つ人が少なくなってきた。できればいつも呼ばれたくないといつのが、最近の文化なのかもしれない。

だけど私は、この「おばちゃん」という言葉が大好きだ。「おばちゃん」という言葉には、私が一生かかっても手に入れられそうにない、器の大きさが感じられるのだ。

私にとっての北木のおばちゃんのようになりたい。身近な「おばちゃん」に助けられ、育てられている人は、たくさんいるだろう。こんな「おばちゃん」の存在が消えてしまうのはやがてしきる。

おばちゃんが「おばちゃん」してたのと同じ年代になつても、私には「おばちゃん」と呼ばれるような風格は全くない。できることならいつか、私も「おばちゃん」という呼び名が似合つ人になりたい。今はまだ、おばちゃんの足元にもおよばないけれど、少しづつおばちゃんの足跡をたどつてみたこと感づる。

とりとめもないことを考へていて、船は笠岡に着いた。これから一時間半の自動車の旅を終えると、私は日常に戻る。そこにもおばちゃんはいないけれど、おばちゃんの記憶を持った私たちが、それぞれの日々を生きていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0119m/>

おばちゃん

2010年10月10日06時39分発行